

太平洋イカ類漁場開発調査

田村真通・鈴木史紀・石川 哲・佐藤晋一

発表誌名

イカ釣漁場開発調査資料Ⅶ（昭和57年3月）P 61～88，昭和56年度太平洋イカ類漁場開発

抄 録

8～10月，開運丸により北緯40°-28'～43°-51'，東経140°-42'～146°-59'の海域にわたって2航海，7～9月，東奥丸により北緯40°-12'～41°-35'，東経141°-44'～157°-47'の海域にわたる2航海によって，漁場環境調査，イカ類釣獲試験及び魚体測定等を行なった。

1. アカイカ

- (1) 東経143°～160°の海域内の水温15℃以上18℃以下の海域面積比率は，ほぼ平年並みで，潮境形成も平年並みだったと考えられる。一方，梅雨明けはやや遅く，7月の真夏日も少ないことも関連して，アカイカの初漁日は7月下旬と遅くなっていた。
- (2) アカイカの分布の中心は，145°E，150°E，155°E及び165°E付近にみられ，40°N，148°Eより北東方向に比較的濃く，安定した分布が連なっていた。8月の平均C.P.U.E.は，55年の2倍以上となっていた。
- (3) 147°E～165°Eの海域の外套背長約31cm級の大型な個体が高い比率で出現したのに対し，沿岸域ではモード20cmぐらいと，近年では最も小型な個体の出現が顕著であった。

2. スルメイカ

- (1) 漁場となる津軽暖流域の水温は全般に低めで，50m層までの浅い海域でその傾向が強かった。
- (2) スルメイカの分布は，例年の調査結果と比較して145°E付近の沖合に10月としては濃い分布がみられたが，全体の分布としては55年をかなり下回っていた。
- (3) 魚体は22cmにモードがあり，過去11年間のうち最も大きく，副モードが16cmに出現しているのも特徴的であった。個体の熟度も，例年東北太平洋海域において主体をなす冬生まれ群よりも成熟度が高かった。